

令和3年度 厚生労働行政推進調査事業費補助金（慢性の痛み政策研究事業）  
分担研究報告書

慢性疼痛診療システムの均てん化と  
痛みセンター診療データベースの活用による医療向上を目指す研究

研究分担者 小杉志都子 慶應義塾大学医学部麻酔学教室 准教授

**研究要旨**

本研究は、他施設と共同で、難治性疼痛および慢性痛に対する学際的医療の介入効果を多面的に定量することも目的とした。また、慢性疼痛診療の均てん化を図る目的で慢性疼痛診療ガイドラインを作成した。

**A. 研究目的**

慢性の難治性疼痛に対する学際的医療の有効性を明らかにするために、当施設痛みセンターにおける難治性疼痛および慢性痛に対する学際的医療の介入効果を多面的に定量することを目的とした。また、慢性疼痛診療ガイドラインの作成に参加した。

**B. 研究方法**

**選択基準：**慶應義塾大学病院痛み診療センターを受診した10歳以上の患者

**方法：**

従来の臨床診療で用いられている疼痛、健康関連の生活の質、心理面、日常生活動作に関する問診 (brief pain inventory :BPI、Pain Disability Assessment Scale: PDAS、Hospital Anxiety and Depression Scale: HADS、Pain Catastrophizing Scale: PCS、Pain Self-Efficacy Questionnaire: PSEQ、EuroQol-5D : EQ-5D、アテネ不眠尺度、Zarit 介護負担尺度、医療保険点数、ロコモ25) について、初診時・3か月・6か月後に施行された結果を解析する。

本研究は、慶應義塾大学医学部倫理委員会の承認を得ている。

**C. 研究結果**

多職種による治療介入（薬物療法・神経ブロック療法・運動療法・マインドフルネス）により、介入前後で身体機能・心理社会的機能の改善効果は得られた。傾向スコアマッチングによる運動療法介入群・非介入群の比較で運動療法によるPDASの有意な改善を得られた。また、脊椎由来疼痛の限定した多変量解析では、疼痛改善の予測因子として、神経ブロック治療併用や短い罹患期間が有意な因子であった。さらに、

破局化・自己効力感の改善と疼痛・機能の改善は有意な相関が得られた

**D. 考察**

無作為化比較試験による非介入群との比較ができていないものの、難治性慢性痛患者に対して早期の多角的な治療介入により、疼痛の改善が期待できる。

**E. 結論**

慢性の難治性疼痛に対して、学際的医療の有効性が示唆されたが、データの蓄積によるさらなる解析を要す。また、慢性疼痛診療ガイドラインにより本邦の慢性疼痛診療の均てん化が期待される。

**F. 健康危険情報**

総括研究報告書にまとめて記載。

**G. 研究発表**

**1. 論文発表**

1. 本田あやか, 小杉志都子; 脊椎由来疼痛の保存的治療における疼痛関連アウトカムに影響する因子の検討. 日本ペインクリニック学会誌. 2021
2. Tanaka C, Wakaizumi K, Kosugi S, Tanaka S, Matsudaira K, Morisaki H, Mimura M, Fujisawa D; Association of work performance and interoceptive awareness of ‘body trusting’ in an

occupational setting: a cross-sectional study. BMJ open.

2021;11:e044303.

3. Tsuji O, Kosugi S, Suzuki S, Nori S, M, Nagoshi N, Okada E, Fujita N, Yagi M, Nakamura M, Matsumoto M, Watanabe K; Effectiveness of duloxetine for post-surgical chronic neuropathic disorders after spine and spinal cord surgery. Asian Spine Journal. 2021. 15;1-9.

## 2. 学会発表

1. 篠原佑太,小杉志都子. 慢性腰痛患者に対する運動療法は自己効力感の向上とともに機能障害を改善する. 第 55 回日本ペインクリニック学, 2021.7.富山 (web 開催)

## H. 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む)

1. 特許取得  
なし
2. 実用新案登録  
なし
3. その他  
なし